

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第573号 平成25年7月8日

質屋の日

7月8日は、「質屋の日」です。もっとも、この日を「質屋の日」としているのは7と8日の語呂合わせで、特別な理由がある訳ではないようです。

「質屋」はその昔「いちろく銀行」と呼ばれていました。これも、 $1+6=7$ という語呂合わせで、符牒の様なものですが、銀行という名が付くと暗さや湿っぽさが少しは軽くなる感じがします。庶民の知恵(?)かも知れません。

さて、「質屋」というのは、庶民から品物を預かり、それを担保にお金を貸すという商売です。「質屋」は、もしお金が期日までに返却されない場合、担保の品物を処分して資金を回収する事になります。このように、質屋が品物を処分する事を「流す」といい、「質流れ品」というのは、その様にして市中に出回った品物の事をいいます。

「サラ金」からお金を借りると、あっという間に利息が膨らみ、返すに返せないという悲惨な話をよく聞きますが、「質屋」からお金を借りた場合は、お金を返せないと預けた品物が流れてしましますが、それで質貸借関係は清算されますので、庶民の味方(?)ともいえます。

私はこれ迄のところ、幸いにも「質屋」に品物を預けなければならない羽目には陥っていませんが、しかし考えて見ると、預けてお金になるような物も持っていませんので、それはそれでいささか残念な気がします。

商売としての「質屋」が登場するのは、鎌倉時代頃で、当時は「無尽銭」と呼ばれていたそうです。それが室町時代に入ると「土倉」という名前と呼ばれるようになり、「質屋」という名称が使われるようになったのは「江戸時代」からといわれています。時代劇を見ていると、軒先に質と書かれた大きな将棋の駒をぶら下げている店が登場したりしますが、それが「質屋」です。今度時代劇を見る時は、気を付けて見て下さい。

「何故、将棋の駒なの?」と疑問の方もいるかも知れませんが、将棋の「歩」は相手陣地に入るとひっくり返って「金」になりますので、それにあやかっているのでしょう。

江戸川柳研究家川上千里氏の資料を見ていましたら、
女房を 質に入れても 初鯉

という江戸川柳が目に留まりました。まさか、幾ら江戸っ子といっても、初鯉を食べたいからといってかみさんを質に入れた人はいないと思いますが、それだけ「質屋」が庶民の生活に密着していたのだらうと想像されます。

また、こういう江戸川柳もあります。

質屋では 利がくい内で 蚊に食われ

この家では、蚊帳を質屋に預けてしまったのでしょね。質屋では借りた金に利息が付き、家では蚊帳がないために蚊に食われるという、なかなか悲惨な生活ですが、それを川柳で笑い飛ばしているところは、庶民のしたたかさというところでしょうか。

以前は、表通りから外れた横道に、小さな看板で「質屋」と書いてあるのを良く見かけましたが、最近の「質屋」は、ショウウィンドウにブランド品が並んでいたりして、昔のイメージはなく、まるで、リサイクルショップのような感じがします。

実際、ブランドもののバッグや美術品などを持ち込んで来る客には、初めから買い取り（質流れ）を希望する事が多いそうです。中には、彼にブランド品を貢がせ、それを「質屋」で換金するという手合いもいるそうですから、心当たりの方は気を付けましょう。

「サラ金」は金銭と数字だけが飛び交う世界です。「質屋」も、サラ金と同様お金の貸し借りの場ではありますが、ただ、「質屋」の場合、お金の貸し借りの間に、お金を借りる人にとっては大切な思いの詰まった品物を介在する事で、ずっと人間的な感じがします。

ところが最近、表向き質屋を装いながら、裏で法外な金利を取るヤミ金が横行しており、新たな社会問題となっています。

現在、貸金業法では多重債務問題の解消を図る為、貸金業の上限金利を年20%に抑えています。一方、質屋は、質草の管理コスト等を考慮し年利10.9%と定められています。この為、質屋の看板を掲げながら、貸金業法の上限金利を超える金利で金を貸すヤミ金業者が出て来たという訳です。

殆ど無価値なものでもこれを担保にお金が借りられるという仕組みの為に、お金を借りる当てのない高齢者が年金を担保に利用するケースが多い様で、新たな多重債務の元凶となりかねません。

この様な偽装質屋は別として、どんなに時代が変わっても、質屋は何時迄も、庶民の味方であって欲しいものです。（塾頭：吉田 洋一）